HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オレーグとイーゴリ ： 年代記のテキストについて
Author(s)	福岡, 星児
Citation	北海道大學文學部紀要, 26(2), 193-223
Issue Date	1978-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33424
Type	departmental bulletin paper
File Information	26(2)_P193-223.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

オレーグとイーゴリ

――年代記のテキストについて――

福岡星児

オレーグとイーゴリ

——年代記のテキストについて——

福岡星児

I

ロシアの年代記に記された九〇七年のオレーグのコンスタンチノープル攻撃の歴史的信憑性をめぐる論争は、一九三〇年代から五〇年代はじめにかけてかなり活潑に行なわれたのを最後に、いまや終熄したかに見える。年代記「過ぎし歳月の物語」は攻撃のあとルーシとビザンチンとのあいだに交わされた条約を九〇七年と九一一年に掲げており、二つの条約文の関係についてはなお判然としない点がないわけではないが、九〇七年のものは暫定的、予備的な協定であると考えられ、九一一年の条約が事実であることにはほとんど疑いの余地がない。しかし年代記の伝える攻撃の情況そのものがまったく伝説的であることと、ビザンチンの史料からは有力な裏づけが得られないことから、オレーグなる公の大勝利に終った攻撃と、その九〇七年という年代には疑問が持たれてきた。ウラジーミルによるルーシのキリスト教への改宗をはじめ、ルーシにとっての大きな歴史的事件が往々ビザンチン側の史料に記録を見出せな

いのは珍しいことではない。オレーグの攻撃の描写がほとんど叙事詩的なそれであること自体は怪むには当らない、むしろ当然のことと言える。しかし九〇七年という攻撃の年代についてはどうであろうか。年代記は信頼できるか、あるいは信頼するしかないであろうか？九一一年の条約はギリシャ語からのほん訳の跡をとどめているのに対して、九〇七年の条文はパラフレイズされたものであり、内容的には九一一年からの抜萃と考えられないこともない。シャフマトフはそれが九一一年の条約から作文されたものであるとした。(1) しかしそれだけでは説明し切れない要素があって、これには反対意見も多い。ただいずれにしても年代記者がなぜそのような形で九〇七年に条文を引用しなければならなかったかということには充分な答えは与えられていない。暫定的な、あるいは予備的な協定と見るのはあくまでもひとつの解釈であり、推測に過ぎない。

もちろん九一一年に条約が結ばれたとすれば、それに先立つ何年か前にルーシの攻撃があったであろうし、それが正確に何年のことであったかは大きな問題ではないとも言える。むしろ歴史家にとってこれはそうであるかも知れない。ソビエト科学アカデミー歴史研究所編「ビザンチン史」第二巻の「九―一〇世紀におけるビザンチンとルーシ」でリタヴリンはオレーグのコンスタンチノープル攻撃が行なわれたのは九〇五―九〇七年の間であるとしている。(2) しかし年代記のテキストをめぐる問題としては、攻撃が果たして九〇七年に行なわれたのであったかどうかは微妙な、かなり大きな意味を帯びてくる。

このあと一〇世紀前半にルーシのビザンチン攻撃はもう一度イーゴリによって繰り返される。九四一年のイーゴリの攻撃の模様は史料的に明らかであるが、前述の「ビザンチン史」でリタヴリンはそれをつぎのように述べている。

九一一年の条約の後やがて表面化するに至ったビザンチンとルーシのあいだの利益の対立が九四一年の攻撃を結果

した。ビザンチン側にとってこの攻撃は不意打ちではなかった。予測されたものであったし、ルーシの動きについてはヘルソンとブルガリアから通報を受けていた。七月八日無数の舟艇から成るイーゴリの艦隊はボスポラス海峡の入口で「ギリシャの火」を装備したビザンチンの軍船の邀撃にあい、ちりぢりになった。艦隊の主力は小アジア海岸の浅瀬にしりぞき、上陸したルーシ軍はビテュニア一帯とヘラクリア、パフラゴニアに至る黒海沿岸を劫略した。九月に入ってようやく、小アジア、トラキア、マケドニアから兵力を集め、態勢を整えたビザンチンはルーシ軍を撃退した。撤退するルーシの舟艇にふたたびビザンチンの軍船は攻撃を加え、壊滅的な打撃を与えた。ルーシ軍の捕虜は首をはねられた。攻撃のこのような不首尾にもかかわらず、イーゴリは帰還すると直ちに新たな出撃の準備に取りかかった。九四三年あるいは九四四年、イーゴリはペチェネーギ族と協定を結んだ後、陸海両面からビザンチンに向かって行動を起こした。しかしドナウ河のあたりで皇帝の使節がルーシ軍を迎え、イーゴリは和平交渉に應じる決意をする。その後まもなく新たな、九一一年の条約に比べてよりビザンチン側に有利な条約が結ばれた。

この条約文も「過ぎし歳月の物語」は九四五年に掲げているが、オレーグの条約（九一二年に掲げられている）と違って、ここには日付けがない。条約の中に現われる皇帝たちの名から九四四年に締結されたと考えられる。条約の全文ではなく、ロシア側の遵守事項に関する部分であるとも見られるので、必ずしも不利な条約ではなかったであろうとも言われる。リタヴリンが要約している九四一年―九四四年の事件の経過はビザンチンの史料、主としてアマルトル（Georgius Hamartolus）の「年代記」（正確にはその継続部分）の伝えているものであるが、再出撃については「過ぎし歳月の物語」に拠っている。その九四四年に述べられているイーゴリの再出撃についてアマルトルは言及していないからである。（条約文は九一一年、九四四年の両条約とも「過ぎし歳月の物語」の訳文以外には伝わらない）

アマルトルの伝える九四一年の攻撃の経過は、ビザンチン側にいまひとつこれを補足する文献があり、事実を伝えたものであろうが、ロシアの年代記はルーシ軍が小アジアに上陸して以後のこと、つまりこの時の戦いの第二段階をはじめに、海戦に先立って起こったことであるかのように述べている。海戦はそのあとでただ一度あったのであり、ここで予期せぬ敵の火器「ギリシャの火」のために敗れて引き上げたのである。しかも「過ぎし歳月の物語」は小アジアにおける戦況を述べるに当って、多分に他ならぬアマルトルに拠っている。もっとも「ノヴゴロド第一年代記」は小アジアにおける第二段階の戦闘についてはまったく触れておらず、アマルトルと異って、ルーシ軍が初めにコンスタンチノープルに迫って付近一帯を劫略したことを述べている。これは九四一年の攻撃についてロシア側に伝聞、ないし何等かの記録のあったこと、「ノヴゴロド第一年代記」はそれにより忠実であり、「過ぎし歳月の物語」はアマルトルに拠って小アジアでの戦闘について補足したのであることを示している。そしてその際「過ぎし歳月の物語」の編者はロシア側の見方をあくまでも崩さず、小アジアでの戦闘をただ一度の海戦の前に置いたのである。この海戦は三回行なわれた海戦の最初のものを指しており、シチャポフが指摘しているように[3]、最初の海戦で大きな打撃を受けたイーゴリはおそらく攻撃を断念して直ちに帰路についたのであろう。ルーシの艦隊は分断され、イーゴリは自分たちが生き残った者のすべてであると判断したのではなかったか。実は小アジアの海岸にしりぞいた舟艇はかなりの数にのぼり、彼等は陸で攻撃を続行して敵をむしろ圧倒した。彼等の撤退も秋を迎えての予定の行動だったかも知れない。しかし二度目の海戦でビザンチン海軍の「ギリシャの火」によって潰滅的な打撃を受けたのである。こうしてロシア側は、それから一世紀以上たってアマルトルの「年代記」に接するまで、小アジアで戦いが継続されたことを知らなかったのである。しかもアマルトルによってこのことを知ってからも、ロシアの年代記者はイーゴリの帰還に

よってすべてが終ったとする見方を変えなかった。言い換えれば九四一年の攻撃は彼等にとっては第二段階からのみ成っていたのであり、小アジアでの戦況はこの第一段階を補足するものとして受け取られたのである。

註

(1) Повесть временных лет. ч. 2, М.-Л., 1950, с. 262-263.

(2) Г. Г. Литаврин.—История Византии, т. 2, М., 1967, с. 226-236.

(3) Я. Н. Щапов. Русская летопись о политических взаимоотношениях Древней Руси и Византии.—Феодальная Россия во всемирно-историческом процессе. М., 1972, с. 201-208.

II

「ノヴゴロド第一年代記」(Новгородская первая летопись младшего извода, First Novgorod Chronicle, younger series, 以下N1と略記)のイーゴリの攻撃は小アジアにおける戦闘には触れていない、つまりアマルトルの「年代記」を参照していないのであるが、しかしそれはこの年代記がアマルトルに負うところがないと言うのではない。事実はむしろ逆である。イーゴリの攻撃についてルーシの人びとが持っていた認識はある意味で頼りないものであって、年代記者は直接にではないが、いわゆる「大叙述によるフロノグラフ」(Хронограф по великому изложению, Chronograph according to the long text)を通じて、やはりアマルトルを典拠としていたのである。この「フロノグラフ」は大部なビザンチンの年代記をもとに編集された言わば要覧であって、「大叙述」とは特にアマルトルの「年代記」を指して言ったものに他ならない。十一世紀にロシアでほん訳され、あるいはすでにブルガリアで

ほん訳されて入って来たビザンチンの年代記は少くとも三種類あるが、アマルトルの「年代記」は最も読まれて、大きな影響力を持った。「大叙述によるフロノグラフ」は同じ十一世紀中に編集されたと考えられるが、今日には伝わらない。しかしその内容は十三、四世紀に作られた他の幾つかのフロノグラフおよびこれと同種の文献によっておおよそ知ることができる。これら後のフロノグラフは「大叙述によるフロノグラフ」を源流としているからである。

しかしこれら後のフロノグラフの中ではアマルトルの「年代記」はしだいに消えて（「融解して」）行き、他の年代記や歴史的、宗教的文献からの抜萃に取って代わられる。[1] 一般にロシアでフロノグラフと呼ばれるようになったものは、さまざまなほん訳文献から編集されたキリスト教的、中世的な意味での「世界史」であり、それぞれのフロノグラフはそれぞれの、一定の範囲の文献群（КОНВОЙ, convoy）から巧みに編集されたコンピレーションである。そしてこのようなコンピレーションの性格はすでに「大叙述によるフロノグラフ」においても見られたのであるが、二つ、ないし三つの型（少しづつ異なった編集の型）があったと想定される「大叙述によるフロノグラフ」（以下単に「フロノグラフ」と略称）の中でも、最も古い型のものはほとんどもっぱらアマルトルの「年代記」に基づくコンピレーションであったと考えられ、アマルトルと同じく、九四八年ビザンチン皇帝ロマン・ラカピン（Romanus I Lecapenus）の死で叙述を終っていた。

「フロノグラフ」は世界史に対するロシア自身の歴史であった年代記の成立に深い関係を持っている。初期の年代記の、特にその冒頭とそれに続く部分の成立の過程は、それをどのように捉えるにしても「フロノグラフ」との関係を無視しては考えられない。

「フロノグラフ」の延長線上に年代記の成立を考えたのはイストリン（一八六五―一九三七）であった。彼によれ

ばすでに「フロノグラフ」そのものの中に（終りに近い部分に）ルーシに関わる諸事件が付け加えられはじめていたのである。ビザンチンの歴史とロシアのそれが交錯する接点となったのは、ルーシのコンスタンチノープル攻撃である。それがアスコリドとディールに帰せられるルーシの最初の攻撃であり、ついで皇帝ロマンの時に行なわれたルーシの攻撃であった。アマルトルの記述にはルーシの公が誰であったのか名前は出て来ないが、「フロノグラフ」の編者はアマルトルの記している攻撃の模様をロシア側の伝聞あるいは伝説と照し合わせて、それがイーゴリの攻撃であることを知ったのである。伝説であったルーシの事件はこうして歴史の中に位置づけられ、これを起点としてルーシの「歴史」が文字化されはじめる。しかしそれはビザンチンの歴史の枠組の中においてであり、はじめはビザンチンと何等かの関連のある事件のみが記され、ついで歴史的な諸事件のあいだに一貫性を求めてしだいに他のルーシ自身の事件をも付け加えて行ったのである。ビザンチンの歴史から独立したロシアの歴史を持とうとする気運が熟するのは十一世紀後半イジャスラフの時代（一〇五四―一〇六八）であり、ここでこの時まですでに「フロノグラフ」の終りに続けて書かれていたロシアの歴史が切り離され、あらためて手が加えられ、そして表題（過ぎし歳月の物語云々）が与えられて、「フロノグラフ」から独立したルーシの歴史である年代記ができ上がったのである。(2)

年代記の成立についてのイストリンの考え方は現在一般的なものではない。殊に「過ぎし歳月の物語」第一編集がイジャスラフの時代に書かれたとすることに伴う年代記の系統に関する彼の見解は否定されている。(3) しかし「フロノグラフ」が年代記に色濃くその影を落としていることは事実であり、年代記は一挙に「フロノグラフ」との深いつながりを断ち切ることはできなかったとして彼が指摘していることの本質は否定し難い。N1が特定の年についてそれを「ルーシのはじまり」の年とし、「過ぎし歳月の物語」にも同様の表現があるが、これらがルーシのビザンチン攻

撃に関係し、またそれがどのような意味においてであったかは、イストリンの説明の通りであろう。

註

(1) O. В. Творогов. Древнерусские хронографы. Л., 1975, с. 10.

(2) В. М. Истрин. Очерк истории древнерусской литературы домосковского периода (11-13 вв.). Пгр., 1922, с. 142-144.

(3) 最近ではアレシュコフスキイがイジャスラフの時代に最初の年代記の成立を考え、また「過ぎし歳月の物語」とN1との関係についてもイストリンと共通する点のある考え方をしている。См.: М. Х. Алешковский. Повесть временных лет. Судьба литературного произведения в Древней Руси. М., 1971.

Ⅲ

年代記「過ぎし歳月の物語」(Повесть временных лет, The Tale of Bygone Years. 以下PVと略記)とN1でオレーグとイーゴリについて記されていることは、彼等のコンスタンチノープル攻撃がそのほとんどであると言ってよい。攻撃に先立って彼等のキエフ占領のことが語られるほかは、彼等のそれぞれによる諸種族の制圧のことが、殊にドレヴリャーネ族とは数次にわたって戦いのあったことが、その都度簡単に述べられるだけである。そして最後に彼等がいずれも攻撃のあと間もなく異様な死を遂げたことがそれぞれの場所で語られるのである。PVでは前述のように条約文が出てくるが、量的には条約文の占めるスペースが大きい。だが条約文の有無だけではなく、PVとN1のテキストには大きな差がある。

PVではキエフを占領するのはオレーグで、この時イーゴリはまだ赤ん坊である。オレーグはリューリクの一族で

はあるが直系ではなく、リューリクは彼にイーゴリを托して死んだのである（八七九年）。オレーグはノヴゴロドを発進してキエフを占領し（八八二年）、さらに周辺の諸種族を従えて、南のキエフと北のノヴゴロドを拠点とする広大な領域を支配する。ついでコンスタンチノープルを攻撃し（九〇七年）、条約を結ぶ。だが九一一年の条約締結の直後に蛇に噛まれて死ぬ（九一二年）。このPVの「魔力ある」オレーグの死のエピソードは有名である。（このあとにティアナのアポロニイの話が続く）

オレーグの跡を継いでイーゴリがキエフの公となるが（九一三年）、彼は再度ドレヴリャーネ族を鎮圧し（九一四年）、ペチェネーギ族と戦った（九二〇年）とあるほかは、コンスタンチノープル攻撃（九四一年）に向かうまで特に何もしていない。再度出撃し（九四四年）、条約を締結した直後に（九四五年）スヴェネリドという者の部下たちの武器と服装を羨んだ自分の従士団に促され、彼等を率いてドレヴリャーネ族のもとへ赴き、過酷な貢納を強要し、遂に反抗に遇って殺される。（このあとにイーゴリの妻オリガがドレヴリャーネ族に対して夫の復しゅうをする物語が続く）

N1ではコンスタンチノープル攻撃の年代も順序もまったく異なっており、おそらくそのためにオレーグとイーゴリの関係も、前後の事件の経過（諸種族の平定）も著しく違うものになっている。キエフ占領はイーゴリと彼の配下の司令官（Воевода）であるオレーグとによって行なわれる。キエフ占領の年代は明らかでないが、八五四年（「ルーシのはじまり」）から九二〇年のあいだのことであり、もちろん九二〇年に近いであろう。この間には年次の記入がなく、事件はそれらが起こった順序に述べられている。これはフロノグラフの叙述形式であり、時に特定の出来事の年代が示され、それによって時間的なオリエンテーションが与えられるほかは、事件と事件との時間的な間隔は明

らかでなく前後関係があるだけである（これに対して年代記では年次は連続して記入され、何事も起こらなかった「空虚な」年についても年次だけは記される）。N1は九二〇年から連続した年次が記入されはじめるが、九二〇年というのはイーゴリ（1）のコンスタンチノープル攻撃の年である。イーゴリは「ギリシャの火」に敗れて帰るが（ここに、九二〇年の最後に予め「この年（彼等は）休息し、次の年も過ごし、三年目に出撃した」という文句があり）、九二一年をイーゴリとオレーグ（1）は新たな攻撃のための準備に費やす。そして九二二年、今度はオレーグが（「イーゴリをキエフに残して」）攻撃に向かい、赫々たる勝利をおさめ（条約のあったらしいことがうかがえる）、戦利品を持ってイーゴリのもとへ帰還する。それから彼はノヴゴロドへ赴き、さらにラドガへ行ったと記され、最後に彼が海の彼方へ渡り、そこで蛇に噛まれて死んだという説のあることが付け加えられる。

イーゴリはキエフに君臨し、ウリチ族およびドレヴリャーネ族と戦かう。彼のもとにスヴェネリド（N1ではスヴェンデルド）なる司令官がいたとあらためて述べられるが、イーゴリはこれらの戦いのあと、このスヴェネリドに特権を与えて自分の従士団の不満を買う（ここまで九二二年）。スヴェネリドの部下たちの武器と服装を羨んだ従士団はイーゴリを促し、イーゴリは彼等の慫慂に耳を貸してドレヴリャーネ族のもとへ赴く（以下この部分はPVとまったく同じで、妻オリガの復しゅうの話へと続く）（九四五年）。

最後のイーゴリの死の経緯はスヴェネリドとのことに端を発して、オリガのドレヴリャーネ族に対する復しゅうに終るまでひとつづきの物語なのであるが、その前半はオレーグの死につづいて九二二年に記され、後半は九四五年に至ってようやく記されている。九二三年―九四四年は「空虚な」年が続いており、ただ九四〇年と九四二年にイーゴリがスヴェネリドに特権を与えることが述べられているが、これは実は九二二年の物語の前半でスヴェネリドに再三

にわたって特権を与えることがすでに語られていたのを、あらためてそれぞれの年次に（「空虚な」年を埋めるために）配したのであって重複している。つまり年代記的な年次はあとから入れられたのである。

Ⅳ

PVとN1とではどちらが真実を述べているであろうか？　年代記のテキストとしてはN1の方が古いと思われる。またPVとN1は互いにある関連を持っていることがうかがえるが、キエフのPVとノヴゴロドのN1との関係はにわかには決定し難い。オレーグとイーゴリのコンスタンチノープル攻撃についてのこのような大きな食い違いはどこから生じたのか？

N1で明らかに文献に基づいて述べられているイーゴリの攻撃（九二〇年）のあとに、エピックなオレーグの攻撃（九二二年）が来ているのは確かに奇妙なことである。イーゴリの攻撃を九二〇年としたのは、皇帝ロマンの即位の年に行なわれた（と解された）ルーシの攻撃をイーゴリに関係づけた「フロノグラフ」の編者であったと考えられている。ロシア側の伝聞、ないし何等かの資料とアマルトルの記述とを突き合わせて、このような判断に到達するのはおそらく困難なことではなかったであろう。が、九二〇年という年代はアマルトルの「年代記」のテキストの読み誤りによるものであった（この誤りがアマルトルの「年代記」からテキストを抜き出す際に、いかに起こるべくして起こったかを指摘したのはシャフマトフである）。

オレーグの攻撃はPVではイーゴリの攻撃（九四一年）とはまったく切り離された別の、過去の攻撃（九〇七年）

である。N1でそれがイーゴリの攻撃の三年後（二年後とも言えるが、年代記の数え方で三年目である）に置かれているのは、報復の攻撃とされているのであろう。だがどこにも報復という言葉は使われていないし、オレーグの攻撃の叙述は淡々としてエピックである（PVの九四四年のイーゴリの再出撃には「報復を意図して」という表現がある）。それに報復だとしたらイーゴリは攻撃の準備をしながら、自ずからはなぜ出撃しなかったのだろうか（何の説明もない）。しかしまたもし報復でないとしたら、ほかにどのような意味づけがあり得たであろうか？

イストリンは前述のように「フロノグラフ」の延長線上に年代記の成立を考えたのであるが、彼によればルーシのコンスタンチノープル攻撃に関しては二つの型の「フロノグラフ」の記述がそれぞれ異なっており、それがN1とPVのあいだに見られる大きな相違につながることになったのである。イーゴリの攻撃が誤って九二〇年とされていたのは、N1がそこから出発した「フロノグラフ」の方であった。この型の概して非常に簡略な「フロノグラフ」には、その三年後にロシア側の伝聞資料に基づく（アマルトルの「年代記」にはない）イーゴリの再度の出撃について何等かの記述があったと思われるのであるが（「この年には休息し、次の年も過ごし、三年目に出撃した」というのは、この「フロノグラフ」にあった文句である）、おそらくそれは年代記者にとって不確かなことに思われ、彼はそれを自分のよく知っている別の攻撃の話に代えてしまったのであろう。しかも公の名もそのまま持ち込んだのである。こうしてイーゴリの攻撃にオレーグの攻撃を接ぎ木したことによって「混乱」が生じたが、年代記者は攻撃と攻撃の中間の九二一年にはイーゴリとオレーグの両者が大軍を集めて出撃の準備をしたと書き入れて、これをうまく解決することを思い付いたのである。(1)

イストリンはN1の攻撃のテキストが「フロノグラフ」から出発して導き出された過程をこのように説明して、イ

ーゴリとオレーグとの関連ははじめにはなく、二つの攻撃のあいだの意味づけはあとから恣意的になされたのだとしているわけである。このような考え方ができるというのは、ひとつにはイストリンがオレーグのことはまったくの伝説であると見なしているからであろう。オレーグのことは「フロノグラフ」にはないが、年代記にはオレーグは言わばどこからでも現われ得るのである。

シャフマトフ（一八六四―一九二〇）はオレーグの攻撃は何よりも報復の攻撃として、イーゴリの攻撃のあとに置かれたのであると考えている。N1におけるルーシの攻撃のテキストの起源について、シャフマトフはイストリンと同様に、イーゴリの攻撃（九二〇年）は「フロノグラフ」に拠るものであり、オレーグの勝利の攻撃は年代記者が結び付けたのであると述べている。年代記者は「これら二つのそれぞれ明らかに出所を異にする情報を調和させることが必要であった。最も見やすい形でそれらを調和させる方法は二つのことのあいだに一定の順序を設定することであった。すなわち最初に敗戦があり、次に勝利があったとするのである」[2]そして九二〇年の敗退に終った攻撃に対して、勝利の攻撃を九二二年とするのが適当であると考え、その間の九二一年は新たな攻撃に向けて準備が行なわれた年とした。このために年代記者は九二〇年の記事の最後に「（彼等は）この年には休息し、次の年も過ごし、三年目に出撃した」と書き加え、九二一年の出撃準備の記事（「イーゴリとオレーグは大軍を集め……」）を作文したのである。

シャフマトフは年代記者がはじめからオレーグの攻撃を敗戦に終ったイーゴリの攻撃に対する報復として「調和」させようとしたとし、イストリンはそういう意味づけはあとからのこじつけであったとしているわけである。テキストは明らかにオレーグの攻撃をイーゴリの報復としていると思われるから、どちらの説明を取るにしても、その限り

では大差はない。年代記者の仕事がいささか杜撰にも、乱暴にも見えるのは止むを得ない。[3] シャフマトフが言うように予め「調和」させようとしたのであったとしても、イーゴリの攻撃のあとにオレーグのそれを接ぎ木したことに変わりはない。しかしシャフマトフのこのような年代記者の意図の捉え方は重要な問題を含んでいる。それはイストリンの場合との大きな差異につながるものである。年代記者が意識的に二つの攻撃の因果関係を求めていたとすることは、結局一貫した歴史的叙述を目指していたとすることである。あとから意味づけをし、辻褄を合わせるのと、はじめから意図的に二つの攻撃を因果関係にあるものとして並べる（「一定の順序を設定する」）のとは、結果としてのテキストは同じであっても、そこに本質的に違う作業を見ていることになるであろう。

だがいまの場合「フロノグラフ」からのイーゴリの攻撃に伝説的なオレーグの攻撃を組み合わせたN1の「奇妙な」テキストは、年代記者の意識の側面からよりも、先ず話の辻褄ということから見る必要がある。「この年には休息し、次の年も過ごし、三年目に出撃した」という文句は年代記者がシャフマトフの言うような意図をもって書き加えたと見るよりも、もともとイーゴリの攻撃の話の中にあったと考える方が自然である。そしてこの文句があってオレーグの攻撃を三年目の九二二年に置いたと見る方が筋が通る。この点ではイストリンの説明の方が本当であろう。

だがイストリンはここにオレーグの攻撃が置かれたことの結果にはあまり注意を払っていないように思われる。オレーグの伝説的な攻撃にはそれ以上の意味を与えようとしなかったのかも知れない。しかし、深く立ち入らないまでも、第一にN1でオレーグは公ではない、公の名をそのまま持ち込んではいない。年代記者があとからオレーグを司令官としたのか、もともと司令官と考えていたのか、それは明らかでないとしても、この攻撃でオレーグは「イーゴリをキエフに残して」出撃し、「イーゴリのもとへ」帰還するだけでなく、さかのぼってキエフ占領もイーゴリと司

令官オレーグによって行なわれるのである。あるいはオレーグは公でも司令官でもなくて、ここではじめて司令官とされたのかも知れない。[4] 第二にオレーグの攻撃はイストリンの言うような意味で「機械的に」この場所に入って来たのではなく、二つの攻撃の接ぎ木を可能にさせるような、あるいはイーゴリと司令官オレーグとを結び付けさせるような何等かの背景があったかも知れないのである。

註

(1) В. М. Истрин. Летописные повествования о походах русских князей на Царьград. — ИОРЯС, т. XXI, 1916, кн. 2, с. 215–236.

(2) А. А. Шахматов. Разыскания о древнейших русских летописных сводах. СПб., 1908, с. 99. シャフマトフにおけるオレーグの攻撃の「出所」は伝説的な物語から成る最も古いある「集」である。またシャフマトフはイーゴリの再出撃のことは「フロノグラフ」にはないとしたわけである。

(3) これはおそらくロシア側に伝聞または伝説は豊富であった反面、書かれた資料は少なかったこと、総じて伝聞資料にはかなり確実な部分といわゆる伝説的な要素とがあったこと、何よりもそれらには日付けが欠けており、したがって前後関係や因果関係が明らかでない場合が多かったこと、によるであろう。年代記がルーシの攻撃についてビザンチンの文献に依存するのは、攻撃の情況のためであるよりは、むしろ日付けのためであったとも考えられる。

(4) シャフマトフはオレーグがここで言わば「降等」されたのだと考えているが、これは逆にまた一定の観点を持ち込んでいることになる。См.: А. А. Шахматов. Разыскания ... с. 318–319.

V

年代記が「フロノグラフ」に負うところは大きいが、シャフマトフにとって「フロノグラフ」は年代記の重要な典

拠のひとつではあっても、その母体ではあり得なかった。シャフマトフは初期の年代記にも一貫した歴史的叙述を読み取ろうとした。萌芽期においても年代記はすでにそれ自身の目的と主張を持ったロシアの歴史であり、フロノグラフとは別なジャンルとして、それ自身の系譜をさかのぼるものであった。

シャフマトフはロシアで独特な発展を遂げた年代記の厖大な寫本に当って、それらの複雑な関係と系統を明らかにして行った[1]。その方法はテキストを相互に全面的に比較し、多くの場合それらのプロトグラフを設定しながら、年代記の系譜を過去へさかのぼるもので、歴史的な視角を併せた比較研究である。

PVはシャフマトフによって十二世紀初め（一一一三年頃）に編集された年代記であり、その後まもなく二度にわたって（一一一六年、一一一八年）それぞれ別人によって校訂されたものであることが明らかにされた。これは現在PVについての定説となっているが、同時にシャフマトフの年代記研究における方法についても、その有効性は広く承認されて（主流を成して）現在に至っている。

シャフマトフの仮説によれば、PVに先立って十一世紀の九〇年代にキエフで「原初年代記」（Начальный сводъ, Primary compilation, 以下NSと略記）が作られ、PVは十二世紀初めの年代記者がNSを基に、そのテキストに手を入れ、改変するとともに、種々の資料による新たな補足を行なって、編集したのである。NSの寫本のひとつは十五世紀に入って間もなく（十二世紀の半ば近くとする説もある）ノヴゴロドの年代記の編者によっても利用され（十一世紀以前のテキストを入れるため）、主としてこの年代記が現存するN1のほか、さらに十五世紀半ばの年代記を経て「ソフィア第一年代記」と「ノヴゴロド第四年代記」にも反映している。N1はその冒頭部分（一〇一六年まで）と一〇五二年―一〇七四年においてNSのテキストを伝えているが、同一とは言えず、前記の二つの年代記に

よって補足される部分もある。(2)

先にN1のルーシの攻撃のテキストの起源に関するシャフマトフの見解について触れたが、シャフマトフはあの場合正確に言えばN1ではなくPVに先行するNSのテキストについて、NSの年代記者の仕事について述べていたわけである。(これに対してイストリンはPVに先行するテキストを反映したものとしてN1を考えず、N1とPVにおけるルーシのビザンチン攻撃の記述の違いは「フロノグラフ」の二つの型に端を発するものと考えたのである。イストリンにとって二つの年代記N1とPVの存在とそれら相互の関係の問題は結局副次的な研究課題であるにとどまった。彼がシャフマトフのNSを認めなかったのは、それを必要としなかったからである)

PVの編者は直接アマルトルの「年代記」に当ってNS(=N1)のイーゴリのコンスタンチノープル攻撃の年次が誤っていたことを知り、九四一年に改めたのであった。と同時に再出撃(九四四年)と条約締結までのイーゴリの攻撃の経過全体について洗い直しをしたのである。このとき編者は他にも何等かの資料を使ったと見られ、再出撃の模様もロシア側の伝聞のみに拠るものかどうか必ずしも断言できない。(3)

PVの編者によって条約文が九四五年に掲げられ、つづいてビザンチンの使節を迎えて行なわれた条約締結のセレモニイのことが述べられたあと、この項は、

かくてイーゴリはすべての國々と平和を保ち、キエフに君臨しはじめた。そして秋が来て、(彼は)ドレヴリャーネ族のところへ行くことを考えはじめた。さらにより多くの貢物を取り立てようというのであった。

という文句で終っている。そして再び九四五年と年次が記され、NS（＝N1）に見られたままのイーゴリの死の物語の後半が直ぐつづけられている（PVの編者は九四五年に条約文と条約締結の次第を入れるに当って、すでに一度そのはじめに九四五年と年次を記していたのである）

この年従士団がイーゴリに言った、「スヴェネリドの家来たちはりっぱな武器と服装で飾り立てているが、われわれは裸か同様だ。公よ、われわれも貢物を取りに行こうではないか、すればあなたも儲かるし、われわれも（儲かる）という寸法だ」イーゴリは彼等の言うことに従って、ドレヴリャーネの地へ貢物を取りに向かった……

ところでイーゴリの攻撃から切り離されたオレーグの攻撃はPVでは、すでに見たように、あらためて九〇七年に置かれたのであった。九〇七年には攻撃の描寫につづいて、「予備的な」協定が現われる。このあとN1と同じくオレーグの帰還のエピソードがあるが、もちろん「イーゴリのもとへ」という表現はない。ほとんど空虚な年が五年つづいたあと、九一二年には先ず九一一年の条約文が掲げられ、条約締結のことが述べられる。そしてオレーグの死の物語に入るのである。

かくてオレーグはすべての国々と平和を保ち、キエフに君臨していた。そして秋が来て、オレーグは自分の馬のことを思い出した。それは彼が餌を与えるように命じながら、鞍を置かせなかった馬であった。と言うのは彼はかって占い師たちに自分が何で死ぬかと尋ねたことがあり、そのときひとりの占い師が答えて「公よ！馬です、あな

が愛し、いつも乗っておられるあの馬のために、あなたは死ぬでしょう」と言ったのである。オレーグは考え込んで、こう言ったのである、「あの馬にはこれからはもう乗るまい、見ることもすまい」そして彼は馬に（然るべく）餌を与えるように、彼のもとへは連れて来ないようにと命じ、こうして彼はその馬を見ることもないままに何年かを過ごし、やがてギリシャ攻撃に向かったのであった。キエフへ帰還し、さらに四年たち、五年目になって彼は馬のことを、かって占い師たちがそのために彼が死ぬであろうと予言したことを思い出した。で彼は馬屋番の長を呼んで言った、「わたしの馬はどこにいるか、餌を与え、大事にしてやるように言っておいたはずだが?」長は答えて言った、「死んでしまいました」オレーグは笑った。そして占い師を非難して言った、「占い師どもときたらいい加減なことを言う、みんな嘘ではないか、馬は死んだが、わたしは生きている」彼は馬の用意を命じた、「あれの亡骸を見とどけたい」やがて白骨と化したかの馬の亡骸と頭が横たわっている場所へ来て、馬をおり、笑って言った、「このしゃれこうべのためにわたしが死ぬはずだったと?」彼はしゃれこうべを片足で踏みつけた。と、その中から蛇がはい出し、彼の足に噛みついた。で、そのために彼は病んで、死んだ。人びとは声を放って歎き悲しみ、彼を運んで行き、シチェコヴィーツァと呼ばれていた丘の上に葬った。彼の塚はいまもあり、オレーグの塚として知られている。彼の治世は全部で三三年であった。

このあとにティアナのアポロニイ（Apollnius of Tyana）の話が挿入されて九一二年の項は終っている。奇蹟を行なう者と言われたピタゴラス学派の哲人とそのほか超能力者たちについての話であるが、アマルトルの「年代記」から取られている。オレーグの死の話との関連でここに挿入されているが、PVの編者にとってオレーグの死の経緯

はいかにも異様なものと思われていたようである。

以上のPVからの引用で注意を惹くのはイーゴリの死の話とオレーグの死の話が同じ表現ではじまっていることである。彼等はふたりとも「すべての国々と平和を保って」おり、「そして秋が来て」それぞれの上に尋常ではない死が訪れる。同様の文句がオレーグの場合にも、イーゴリの場合にも使われていることは、シャフマトフが言うように、そのこと自体警戒心を起こさせるのである。「……すべての国々と平和を保ち……そして秋が来て……」はPVに先行するテキストでは一度だけ出て来ていたのを、PVの編者が重複して使ったのではないだろうか。そして二度使われているこの文句は、PVの編者がその中間に新たなテキストを挿入したことを示すものではないか。NSにおけるオレーグとイーゴリのテキストを考えるに当って、シャフマトフはPVのこの重複する文句を手掛かりとしたのである。シャフマトフはこの文句のNSにおける本来の場所はイーゴリがドレヴリャーネ族のところへ赴く箇所であったとした。ルーシの公が貢物を取り立てに行く（полюдие）のは秋であったから、イーゴリの話においてこそ秋は意味を持っているからである。N1ではこの文句が落ちたのであるとして、シャフマトフはNSとN1との関係について複雑な説明を行ない、多分にPVに椅りながら、NSのこの部分のテキストを再構成している。(4)

NSにおいてこの表現がどういうコンテキストにおいて使われたのかはシャフマトフによれば次のようである。

NSの編者はオレーグの死のあとイーゴリがキエフに君臨して（九二二年）から、死ぬまで（九四五年）の長い期間に連続的な年次を入れたが、その際「空虚な」年を埋めるために、イーゴリとスヴェネリドによるウリチ族およびドレヴリャーネ族との戦かいのことは何度かに分け、それらを別々の年次に配したのである。イーゴリの死の物語は九四五年に述べようとした（九四五年がイーゴリの死の年であるから）のであるが、いよいよ九四五年のそのときに

至って、あらためてイーゴリがドレヴリャーネ族のところへ出かける動機を説明するためのきっかけを失って、「イーゴリはすべての国々と平和を保ち……そして秋が来て……」という文句を考え付いたのである。そのあと先を急いだ編者はイーゴリの従士団の不満の後半から物語をはじめて（「この年従士団がイーゴリに言った……」）、実は前半に主要な動機の説明があることを見落としてしまったのである（スヴェネリドに対して特権を与えたイーゴリに向かって従士団が不満を言うくだり、――その不満からイーゴリを唆すという後のくだりが切り離され、この「後半」から話をはじめたということである。実は従士団の言葉はひとつづきのものであった）。

シャフマトフはここでNSにさらに先行するテキストを想定しているわけである（Ⅳの註（2）参照）。N1はNSを反映しているだけでなく、一部分そのテキストをも反映しているのであるが、N1でこの文句が落ちたのはイーゴリが自ずからの発意によってドレヴリャーネ族のところへ行くということが、それに続くことになった（NSで）イーゴリが従士団の慫慂に耳を貸して出かけるというもともとの動機の説明と矛盾していたからである。

PVはNSのこの部分をそのまま受け継いでいるばかりでなく、この文句をもう一度オレーグの死の物語のはじめにも使ったということになる。だがPVでオレーグの死の物語の導入部になぜこの文句が再び使われたかということについてのシャフマトフの説明は充分ではないし、説得的とも思われない。しかしシャフマトフの説明は別として、オレーグの死の物語の導入部にこの文句はうまく適合しているように思われるのである。

註

（1）ロシアの年代記は chronicle と言うよりは annales であり、それぞれの年代記は先行する年代記を取り込んだ（先行する年代記を冒頭に掲げた後、書き継ぐ形を取る）いわゆる「集成」（свод, compilation）である。ほとんどが無名の年代記者の手に成るものであり、現存する写本の大部分は十

五—十六世紀のものである。

(2) А. А. Шахматов. Разыскания…, с. 1–12, 197, 199.

(3) シャフマトフは九四四年の叙述は「次の六四五三年（＝九四五年）に平和条約が現われることを説明するために考え出された」、つまり作文されたとした。См.: А. А. Шахматов. «Повесть временных лет» и ее источники. — ТОДРЛ, т. IV. М.–Л., 1940, с. 72.

(4) А. А. Шахматов. Разыскания…, с. 100–107.

Ⅵ

トゥヴォロゴフは比較的最近の論文でシャフマトフによるNSの設定の意義を高く評価し、NSの存在を再確認する立場から、あらためて一〇一六年までのN1とPVのテキストを比較している。[1] 未完、未発表の論文の多かったシャフマトフの見解を整理するという意味と、NSの再構成の可能性をあらためて探るという方法論的な問いかけの意味においてである。トゥヴォロゴフはここでほとんどPVとN1との比較に限定しながらNSを考えようとしており、NSのテキストの再構成には困難な、あるいは問題の多い部分がかなりあることを認めながら、それらの解決の方向についてコメントを加えている。

この論文の中でトゥヴォロゴフはPVのオレーグの死からイーゴリの死までの、つまり「そして秋が来て……」にはじまり、もう一度同じ文句が現われるまでの間のテキストは、研究的インタプリテイションにとって最も複雑な箇所であるとしながら、この表現をシャフマトフがその本来の場所である（NS以来の）とする位置で使って、「かくしてイーゴリはすべての国々と平和を保ち、キエフに君臨しはじめた。そして秋が来て、ドレヴリャーネ族のところへ行くことを考えはじめた……」とそのあとに続くことと矛盾する作文をしたのはPVの編者であると思われる

と結論し、シャフマトフが行なったNSのこの部分のテキストの再構成には難色を示している。シャフマトフが幾つかの年代記のテキストのあいだに複雑な関係を設定しながら再構成を試みたNSのテキストが結局説得的でないことについて、トゥヴォロゴフはその原因はシャフマトフのNSの考え方の中にあるのではないか、――シャフマトフが連続的な年次はNSの編者によって入れられたと考えている点は修正を要するのではないかとしている。

NSにおいてイーゴリの攻撃は九二〇年とされた（それがN1に引き継がれた）のであるが、九二一年（出撃の準備）、九二二年（オレーグの攻撃）の年次が入れられたのもこのとき、つまりNSが編集された時点であっただろうかという問題である。シャフマトフはそう考えていた。

年代記（NS＝N1）で基点とされた年代はイーゴリの死までの間に少くとも二回あって、いずれもルーシの攻撃に関連していた。八五四年（ルーシのはじまり）と九二〇年で、これらが「フロノグラフ」に拠るものであったことは前述の通りである。イーゴリの死の年についてもほぼ同様であって、シャフマトフによれば(2)、イーゴリが皇帝ロマンと同時代人であったことを強く意識していたNSの編者は、同じ「フロノグラフ」によってロマンが帝位を失ったのが九四五年であることを知り、イーゴリの時代も同じ年をもって終るとしたのである。（これがあとでPVにおいてイーゴリの再出撃と条約締結の直後になったのは偶然だったのだろうか？）

NS（＝N1）では九二〇年以後連続的な年次が入っているが、シャフマトフはNSの編者が、先に見たように、二つの攻撃をその因果関係を考えて一挙に九二〇―九二二年に入れただけでなく、同時にそれ以後の年次も連続的に入れたと考えていた。イーゴリの死の年の決定はそのために必要であった。結局シャフマトフはNSがはじめから九二〇年以後の連続的な年次を持っていたと考えていたのである。

これに対してトゥヴォロゴフははじめ年次が八五四年、九二〇年、九四五年と三回だけ置かれて、指標となっていた段階があり、連続的な年次は同じNSの校訂者によってあとから入れられたと考えるべきだとしているのである。その場合にはNS(=N1)においてイーゴリの死の物語は校訂の段階でその前半(スヴェネリドに特権を与えたイーゴリが従士団の不満を買うことまで)が九二二年にオレーグの死につづいて述べられ、後半は九四五年に(従士団がイーゴリにドレヴリャーネの地へ行くことを持ち掛けて云々)あらためて続けられる形になったということになる。したがってNSで前半の主要な動機は落ちていなかったのであり、シャフマトフの行なっている「そして秋が来て……」という文句がNSの彼の考える本来の場所でどういう意味で使われたかの説明は成り立たなくなる。

トゥヴォロゴフはしかしこの文句が使われたのはNSのイーゴリの死の物語に関連してである(貢物を取り立てに行く季節は秋である)というシャフマトフの考え方は受け入れている。で、彼のコメントは、あとから九二三年―九四四年の連続的な年次を入れ、それに伴ってテキストに変改を加えた校訂者の仕事の過程でそれまでどこかにあった秋という季節を示す表現が落ちた可能性があり、それがPVであのような形で残ることになったのであろうと言うことである。

また校訂の段階で連続した年次が入れられたという同じ見直しから、NSにおける九二一年、九二二年もあとから入ったと見なければならないであろうと、シャフマトフに修正を加えている。つまり「この年には休息し、次の年も過ごし、三年目に出撃した」という文句によって九二二年にオレーグの攻撃を当てはめ、ついで九二一年にイーゴリとオレーグが攻撃の準備をしたという作文をしたのではないかというのであって、ここでトゥヴォロゴフは前述のイストリンとほとんど同じ考え方をする結果になっている。したがって実はNSの連続的な年次についてのシャフマト

フの考え方を修正するということは、シャフマトフにおけるNSのあり方そのものを崩すことにつながりかねない。シャフマトフにとってNSは単なる作業仮説としての存在ではない。NSの中にシャフマトフはPVに先行する年代記としての一定の歴史的、政治的なコンセプションを予定しているからである。

それはともかくトゥヴォロゴフは「そして秋が来て」が落ちたとして、では連続的な年次の入れられたNSのどの箇所にあり得たかと言えば、それは（それだけが）はっきりしない問題として残ると述べている。

註

（1）О. В. Творогов. Повесть временных лет и Начальный свод (Текстологический комментарий). — ТОДРЛ, т. XXX. Л., 1976, с. 3-26.

（2）А. А. Шахматов. Разыскания …, с. 108.

VII

PVのオレーグの死の物語の冒頭の「かくてオレーグはすべての国々と平和を保ち、キエフに君臨していた」と、イーゴリの死の物語の冒頭の「かくてイーゴリはすべての国々と平和を保ち、キエフに君臨しはじめた」とはほとんど同じで、ただイーゴリの場合は「君臨しはじめた」（нача княжити）とあるのが違うだけである。しかしイーゴリはこの時に公となったわけではない。この表現の意味するところは「その後再び攻撃のことはなく、また特に記すべきこともなく時が過ぎた（あるいは、過ぎはじめた）」と言うことであろう。PVの九一三年にはイーゴリが「君臨しはじめた」（почя княжити）とある（「平和を保って……」はもちろんない）が、この場合はイーゴリがキエフ

の公となったのは九一三年であると言う実質的な意味を持っている。

オレーグの死の物語で、そこへ秋が来たというのも、本来特定のどの年のでもない秋のことであろう。オレーグの死の物語にも年次の計算に関わる表現があるが、それはあとから出てくる。四年たち、五年目になって、とあるのがそれである。しかし五年目の秋にとは表現されていない（結局そういう意味にはなるが）。冒頭の秋は季節だけを言っている。しかもこの秋は必要なのであって、もちろんいきなりただ「思い出した」とするわけには行かない。秋が機縁とされている言わば文学的な表現であって、もともとの伝説的な物語にあったものであろう。だとすればこの文句の本来の場所はここであって、イーゴリの死の物語の冒頭ではない。「すべての国々と平和を保ち……」という表現も、「キエフに（君臨して）」というのはあとから付け加えられたのであって、もともと伝説的物語の中にあったのかも知れない。しかしN1には九二二年オレーグが死んだあとのイーゴリについて、諸種族と「戦かいつつ、キエフに君臨していた」とあり、何とも言えない。いずれにしてもここでは次の「そして秋が来て」とひとつづきの表現が形作られている。「秋が来て」だけを切り離して、NSの中にその場所を求めるのは適当ではない。

PVの編者は二度目には意識的にイーゴリの死の物語の冒頭にこの表現を使ったのではないかと思われる。N1（＝NS）で九二二年に取り残されてではあるが、述べられていた物語の前半がPVでは完全に姿を消してしまったからである。スヴェネリドのことはPVではここで（九四五年に）はじめて出て来る。で、もともとのイーゴリの死の物語はその半ばから（「この年従士団はイーゴリに言った……」）はじめられることになったのである。したがってこの表現はもしそれを前に置かなかったら唐突にはじめられることになる物語のその唐突さを避けるために、あるいはやわらげるために使われたのだと一應は考えられるのである。しかし物語の前半（スヴェネリドに特権を与えた

ことに対する不満）が姿を消しても、それは同じ理由の前半分であったわけであるから（元の物語の背景は失われるとしても）読む者には大差はないのである。編者がわざわざあの表現を前に置いて、おまけにドレヴリャーネ族のところへ行くことをイーゴリの発意であるかのようにしてしまったのはなぜだろうか？　しかもそれは直ぐ次にある従士団の言うことを聞いて出かけたと言うことと矛盾するのである。

思うにPVの編者はイーゴリの発意にしなければならなかったのである、つまり彼はこの物語の意味を変えてしまったのであり（もちろん彼は次の「従士団がイーゴリに言った」のくだりには手を入れるべきだったかも知れないが、しかしいまやこちらの方がイーゴリにとっての単なる「きっかけ」に過ぎなくなったのである）、いまや事の真の原因は従士団の不満でも、誘いでもなく、にわかに思い立ったイーゴリの決意にあるのである（運命に支配されて？）。秋が来てオレーグは（馬のことを）思い出し、秋が来てイーゴリは（ドレヴリャーネ族のところへ行こうと）思いはじめる。「そして秋が来て……」に終る文句はオレーグの物語で突然訪れる、人間には予測できない死の前触れとして、シンボリックな意味を獲得したのではないだろうか。PVの編者はイーゴリの死の物語の冒頭に極めて意識的にこの表現を使ったのではないかと思われる。

年代記にはイーゴリは再三にわたる誅求に堪えかねたドレヴリャーネ族によって殺されたとだけ述べられているが、それが残酷な殺され方であったらしいことは、オリガの復しゅうの話の中でドレヴリャーネ族の使節が洩らす言葉から察せられる。スヴャトスラフ（イーゴリの子）について詳しいビザンチンの歴史書（Leo Diaconus）によれば、イーゴリは「二本の木に縛り付けられ、二つに引き裂かれた」のである。(1)

オレーグの死の物語に戻るが、年次の計算に関わる表現は攻撃から帰還して五年目にということのほかに、最後にオレーグの治世は全部で三三年であったという結びがある。PVの編者があらためてオレーグの攻撃を九〇七年へ持って行った根拠は何であったであろうか？　日付けのある条約文は九一一年のものであり、この中にオレーグは公として出て来る（これに基づいてPVではオレーグは司令官ではなく、公とされた）。しかしこの条約文の文言からそれ以前にも予備的な協定があったことが分かったので、攻撃直後に結ばれた条約なるものが作文されたのだ（前述のようにこれには反対意見が多い）としても、それが五年前であり、攻撃は九〇七年に行なわれたのだとする根拠は掲げられている条約文からはうかがえない。一方オレーグが条約の締結された直後に、九一二年に死んだということはどうして確められたのだろうか（N1からもまもなく死んだらしいことはうかがえるが）？

シャフマトフはこれについて面白い指摘を行なっている。PVの編者はオレーグの治世を三三年とし、イーゴリの治世も三三年としている（このことはPVの八五二年の「年代表」にも記されている）が、三三というのは叙事詩的な数（эпическое число）であって、つまりフィクションである。編者はNS（＝N1）のイーゴリの死の年から逆算して（945-33）、オレーグの死を九一二年とした。またオレーグの死の物語の中にキエフに帰還して五年目に馬のことを思い出したとあることから、攻撃は九〇七年に行なわれたとしたと言うのである。(2)

この最後の点は疑問である。九〇七年が先に決まっていて、そこから九一二年まで五年を数えて行ったと見る方が自然である。はじめからこのような数字を含んだ伝説があったとは考え難いからである。五年数えたのは条約締結までオレーグを生かしておくためだったか、条約締結の直後にイーゴリの死から逆算したオレーグの死の年が来ることになったのは偶然だったのか。三三年というのがエピックな数だったとしても、おおよそそういう数字が出て来た上

でのことだったであろう。いずれにしてもオレーグの唐突な死の物語はいっそう効果的なものとなり、年代記者自身にとっても感銘深いものになったのであったかも知れない。同じように攻撃、条約締結の直後にめぐって来ることになったイーゴリの死に、オレーグの死との暗合を見て、年代記者はあの同じ死の前触れの句をもう一度使い、そしてひそかにふたりの公の治世を同じ三三年にすることを思い付いたのであろうか？

それはともかくPVの編者がオレーグとイーゴリの関係を公位の継承の関係に置き、オレーグを傍系の出身とするなどの苦心または細工をしてリューリク王朝の系譜に組み込んだ、というより王朝の系譜そのものを作り上げたことは確かである。PVの編者は年代記の連続的な年次を九二〇年からさらに八五二年（PVにおけるルーシのはじまり）までさかのぼらせた。それによればリューリクがオレーグに後事を托して死んだのは八七九年（912-33）であり、三年後（エピックな数！）にノヴゴロドを発進したオレーグは八八二年キエフを占領したのであった。「年代表」はキエフの公となってからのオレーグの治世は三一年であるとまで記して念入りである。

シャフマトフはこのような系譜の観念がすでにNSにおいて色濃く出ていたと考えている。そしてそのことが、そういう歴史的なコンセプションをNSの編者に想定したことが、シャフマトフのNSのテキストの再構成を支えていたと同時に、マイナスにも働いていたように思われるのである。

（1）Повесть временных лет, ч. 2. М.-Л., 1950, с. 294-295.

（2）Там же, с. 263.